

3学期における気アップ！テストで満点大作戦

「社会科の百点満点大作戦」 ～高学年～

神戸おもちやばい 中村 カ

はじめに

学力研の久保齋先生が以前から提唱されている、「百点満点大作戦」にあこがれ続けている。しかしながら、なかなか上手くいかず、もがいている。だからこそ、いろんな手立てが知りたくて、今月号のテーマを考えた張本人が私である。自分なりに考えて実践してきたことも、皆さんにお伝えしたうえで、私も今月号を熟読し、三学期、一人でも多くの子どもたちに百点満点の喜びを感じさせようと思っている。

そんな矢先、私が運営している特別支援の学習会の中で、神戸市教育委員会の指導主事をされている先生から、興味深いアドバイスを頂いた。それは、私の教室にいるキレて大声を出して暴れる子どもへの対処法と

して、テストで百点満点をとらせることから実践をするとよいという内容だった。キレる子はテストの受け方や勉強の仕方のごくに必ず課題が見られる。だからこそ、担任が、「先生のアドバイスを聞いたら、絶対に百点満点がとれる。」と宣言したうえで、個別にテスト対策を指導する。

そうして、本当に百点満点をとらせたら、その子自身の自己肯定感があると同時に、担任に絶対の信頼を置くようになり、キレたときの大声を出して暴れる以外の対処法に対するアドバイスもやってみようと思うようになる。そして、子どもが変わっていくのだと。「百点満点大作戦」には、特別支援の子も変えてしまうほどの効果をもっているのだ。学力実践の大きな可能性を感じた。

社会科の百点満点大作戦① ～要点のまとめ方を知る～

テストで高得点をとれない子どもたちは、教科書を読んでもどこがテストに出てくる大切な要点なのか分からない。要点を見つける力を一年かけて身につけさせることがなにより重要である。

・ 普段の授業で、大切な言葉に赤線を引かせたり、ノートに書き写させたりしておく。(ノートを端から端まで覚えれば百点満点がとれるノート作りが基本。)

・ テスト勉強として、テスト範囲をノート見開き一ページにまとめさせる。(はじめのうち、一人でまとめることが難しい子には、教師が作成した見本を渡す。二回目からは、前回のノートまとめて素晴らしかった子どものノートのコピーを渡す。)

・ まとめたノートを見せ合う。優れたノートをコピーして掲示する。

社会科の百点満点大作戦②

「問題づくり」挑戦く

テスト範囲のノートまとめと同時に、テスト問題を予想しながら自分で問題を作ることに取り組ませる。

(詳細は、久保齋先生の本「子どもを伸ばす一斉授業」小学館 をご覧ください。)

・宿題で、テスト範囲から問題を考えてノートに書いて来させる。(初めてのときは高学年でも難しいので、授業時間を使って一緒に考えた方がよい。)

・次の日、テストをする前に、隣同士や班の中で、作ってきた問題を出し合う時間をとる。

・いい問題を取り上げて紹介したり、ノートを掲示したりして、問題づくりの質を高めよう。

この方法の優れているところは、子どもたち同士がテスト勉強を通して繋がりを深めていけることだ。テスト問題づくりをしていると、本番

のテストと全く同じ問題を作っている子が毎回何人も現れる。すると、隣の子や班の子が、テストを終えた瞬間に、「ありがとう。〇〇さんのおかげで、あの問題はすぐ解けたよ。」とお礼を言いに行く光景が見られるようになる。そして、感謝された子は次回もつとがんばるようになり、感謝した子も、次回は自分もお礼を言ってもらえるような問題を作りたいうと、さらに努力するようになるのである。テストを通じて、点数の高い子と低い子が分断されるのではなく、子どもたち同士で連帯して、テストに立ち向かっていくようになるのである。人のためなら、自分のため以上にがんばれるのだ。

社会科の百点満点大作戦③

「テストは担任の手作り」

こうして、力を入れて取り組んでも、なかなか百点満点が思うようには増えなかった。よくよくテストを分析してみると、業者が作ったテストには、教科書やノートを全て覚え

たとしても、満点がとれないような問題が往々にして混ざっていることに気づいた。(気づくの遅すぎです。)やはり、授業で教えたことがきちんと理解できているかはかるのであれば、授業者自身の手で作ったテストが一番ぴったりくる。業者テストに頼りきっていた私だったが、先日社会科の単元テストを自作した。今回は満点大作戦を意識しておらず、若干難しいテストにしてしまったため、満点こそ少なかったが、難易度に対しての子どもたちに出来には、かなりの手応えがあった。他のクラスには申し訳なかったが、私のクラスの出来がやはりよかった。それはもちろん、授業者とテスト作成者が同じだからだろう。

三学期の初回の理科と社会科のテストで、私は百点満点大作戦に挑戦する。今月号で学ぶ様々な学力研の実践と、私の今までの実践の蓄積を生かして。そして、一人でも多くの子どもたちに勝利の感動を味わわせる。